

花

花と言えば桜のことを指す約束になっているのは、何も俳諧だけに限ったことではない。ふつうに言われている花見・花時・花曇・花吹雪・花冷などという言葉は、桜を指すに決っている。

だが、昔から日本人が、とくに桜を花と言ったわけではない。万葉集の後期になると、中国の詩文の影響を受けて、花を鑑賞する態度が歌の上に現れているが、当時の新知識人たちは、むしろ梅、あるいは桃の花を賞めたたえている。桜の花が注目されたのは、むしろ別の生活上の必要、つまりその年の穀物の豊凶を、その花の散りぐあいで占うためであった。

花とは元来、花ではない。前兆・先触れということだ。「ほ」「うら」ともいう。雪は豊年の前兆として喜ばれたが、それは稲の花の象徴と見立てられたのである。そういう意味での花は、雪の外にも、柊や椿(山茶花)や卯の花や躑躅や、いろいろあったが、三月を代表するものは桜であった。

うちなびき春来たるらし山の際の遠き木末の咲き行く見れば 尾張連(万葉集)

この歌など、村から山の際の桜がいっぱい咲いているのを眺めて、嘆賞しているのであるが、同時に花の咲くさまを見て、その年の収穫を予祝する気持ちも伴ってしよう。花の咲くのを見て、幸を思うのも、原因は遠いところにあったのだ。

山の桜にも遅速があって、次第に高いところに咲き上って行く。そのような一つの時間的経過を、この歌は含んでいる。私がそういう意味のことを書いたら、林房雄氏が、家から見える山の桜は、高いところから低い方へ咲き下って行く、と異論を唱えた。場所にもよるし、日当りのぐあいにもよるだろう。

ともかく、山の桜を見てその年の稲のみを占ったのだから、それは稲の花の象徴なのである。花が予定より早く散ると、その年の収穫にとって、悪い前兆である。そのことから、平安期の初めごろから、花鎮めの祭(鎮花祭)と言って、「やすらへ花や」とうたいながら、花が散らないように念じ踊った。日本人が、桜の花の散るのを惜しむ気持ちのもとには、そのような信仰の伝承があ

る。美しいものが散り失せるのを惜しむ気持の前に、稲の花と結びつけて考えた切実な願望がある。

今でこそ花と言えば、栄えること、花やかなこと、盛りのとき、あるいはもっとも楽しいときを意味するようになっている。だが昔は、花と言えば、もろさやいつわりや上べだけのことという意味があった。それは散りやすいものであり、頼りなく散って行くものであった。春と夏の交替期に行われる鎮花祭には、もっとも切実な気持で、花のやすらうことを祈った。やすらうとは、躊躇する意味で、後に休息することに転じた。「やすらへ、花よ」とは、そのまま、じっとしていてくれよ、という意味だ。桜の花が稲の花に見立てられ、田の稲虫をはらう意味から、人の疫病その他、生活上のあらゆる災いを鎮めることに、考えが拡がって行った。そのような生活上の切実さが信仰を脱落させると、花そのものへの愛情の切実さに転化して来るのだ。

だから、万葉の時代にはまだ、桜の花が日本の花の代表として、審美的に愛着されるような条件は、十分そろっていなかった。当時はまだ、梅と桜とが王座を争っていたと言ってよい。だが結局、梅は主として知識階級の鑑賞の対象にすぎなかった。桜が愛着の対象となる根は、広くかつ深かった。